

特殊学級の思い出ー完全燃焼の日々ー

谷口順子(昭和 40~49 年度在職)

懐しい時間を、しみじみ顧みるチャンス戴いた事に感謝しながら、若草学園内特殊学級に着任した当時を紐解いてみました。エネルギーのぎっしり詰った玉手箱をあけたようで、全身の血が熱くなるのを覚えました。写真を見ても記録を見ても、現在はとても信じられない事ばかり、でも確かな事実です。教室が無いので学年合併の授業であったり、カーテンで間じきりしただけの教室で、隣の授業のジョークにどっと笑い声のあがるような恵まれない条件の中で実に見事な教育課程が展開されており、私は、一週間の持ち時数が、38 時間の年も 41 時間の年も、ちゃんと乗り切っているんです。小学校の低学年を担当した他に、午後は中学校の家庭科や英語の授業を担当した上に、ベッドサイド授業までサービスし、一日 7 時間というフルペース。その内容の充実している事に、圧倒されながら諸先輩の指導力と主任の西村先生の気概に感服させられています。『為せば成る』という諺通り、少ない教員数で、設備も整っていない悪条件を、ものともせず、ただ、ひとすじに『つなぎの教育』という任を果すために、一丸となって頑張っていたのです。治療期間だけの在籍で、普通校に戻る子どもたちに対して、『義務教育に空白をつくらぬこと!』これが、私達の合言葉でした。そのために県北の中学校から来ている子と県南の中学から来ている子のために、2 種類の教科書を使った英語の授業だったり、小学校の国語も、算数も、教室中の子どもが全部違う教科書という破目に陥った事もありました。実技を必要とされる家庭科の授業など、必死で勉強しないと教えられない事ばかり、中央の写真は、右手の利かない子が 3 人もいるグループで、電動ミシンのペダルに工夫を加えたりしながら、全員落ちこぼれなく、パジャマを完成させた喜びと感激をこめファッショショーをした時の思い出です。初めて重度の脳性ヒ児を受け入れた時の苦闘も、さわやかに甦って来ます。この園は、園と学校が一心同体で動いており、臨海訓練も、運動会も、雪山訓練も、一緒に企画し寝食を共にした良き時代です。



懸命に仕上げたパジャマ